

佳作

「科学的根拠の先に」

奥本和樹(武田薬品工業株式会社 福岡支店 福岡病院リージョナルグループ)

私がMRという職業を選んだキッカケ。それは、まぎれもなく母の死であった。母が亡くなるまでの闘病生活で感じた「悔しさ・はがゆさ」、変化していく家族の在り方を目の当たりにしたことが、MRという職業を選択する全ての始まりであった。

母の入院が始まったのは1995年の夏、私が小学6年生の夏だった。父からは「すぐに退院してくるから安心しなさい」と言われていた。しかしそれから、1ヶ月、半年、1年と時間が経っても、母の入退院は続き、症状は悪化していった。転移癌だった。入院生活が長引くにつれ、家族の生活も次第に変わっていった。

父は看病への疲労から仕事を休職することになった。以前と比べると、怒りをあらわにすることが多くなった。2人の妹達は、母の見舞いに行くことが多くなった。以前と比べると泣いている時間が多くなった。私は、母が好きだった野球だけに没頭することで、母のために頑張っていると自らを説得した。

家族全員に共通していえることは、癌と闘う母を中心に考え、共に闘病生活を歩んだということ。母だけでなく、家族全員の生活が大きく変化したこと。そして看病する私たちは、医療の知識が全くなく、ただひたすら感情的に母を励まし続けることしか出来なかったことに、「悔しさ・はがゆさ」を感じていたこと。母に会うたびに死を覚悟しながら、笑顔で話しかけることしか出来ない辛さは、今でも忘れることが出来ない。

就職を考える際に、やはり母の死が大きかった。なぜ予防することが出来なかったのか、なぜ治療することが出来なかったのか、もっと緩和ケアは充実出来なかったのか、より良い医療制度であれば、より良い治療が受けられたのではないか。私は大事な人の死を可能な限り避けたいという思いと同時に、「これらの科学的根拠を闘病生活の間に知っていれば、看病する家族はどれだけ救われただろうか」と看病する家族も救いたいという思いが芽生えていた。そしてこのような医療全体に関する科学的根拠を伝達していく職業としてMRに出会った。

私は現在2年目のMR。医療全体と関わり情報伝達を行い、患者だけでなく患者の家族に良い影響を与えられたのであろうか。1つのエピソードを通じて考えた。弊社は経口糖尿病薬を3剤持っており、経口糖尿病薬では世界でもTOPシェアである。自他共に認める

糖尿病のリーディングカンパニーである。糖尿病は、従来から言われている失明や透析を引き起こすリスク因子というだけでなく、死亡リスクが極めて高い脳卒中や心筋梗塞を引き起こすリスク因子であるということが明らかになってきた。それにも関わらず、糖尿病の本当の危険性はまだまだ認識されておらず、治療への意識もまだまだ低いというのが現状であった。

私のMRとしての仕事は、糖尿病治療薬を普及させることだけではない。医療関係者や患者・患者の家族に、疾患への認識を高めていただき、病気と向き合っていただくことである。そのために勉強会等を通じて、糖尿病疾患に対する啓蒙活動を行った。私が行った活動は直接処方を行う医師だけではなく、薬剤師や看護師といった患者と関わる多くの方々に啓蒙活動を行った。後日、糖尿病治療薬を処方されている医師に、「副作用や効果はいかがでしょうか??」と尋ねた。「今のところ副作用は全くないよ。対処方法を薬局の方がしっかり話してくださったみたいです。効果も非常に良いですね。何でこの薬を飲む必要があるのかを話して下さったみたいで、患者の家族の方々も食事療法に協力していただいているみたいですよ」と教えていただいた。

私の1つの目標が達成された瞬間であった。疾患に対する治療だけでなく、疾患に対する啓蒙や予防に関する認識を高めることが出来た。そして何より患者の家族に対して科学的な根拠を通じて、「食事療法を厳格に行えば、治療効果が上がる」という1つの方向性を共有していただくことが出来た。患者と患者の家族、患者と医療関係者の橋渡しになることが出来ると確信を得た瞬間であった。

今でも、私たち家族が行っていた感情的な看病を決して否定はしない。むしろ、ただ笑顔で応援することは、家族にしか出来ないものであり、患者の心の支えであることは間違いない。ただその家族の感情に科学的な根拠が加わることで、患者への治療効果は確実に上がる。また看病する家族に1つの方向性を示すことが出来る。「何とかしてあげたいけれど、何をしても良いか分からないこと、何も出来ないこと」がどれだけ辛いかは、闘病生活に関わった人なら誰しも分かる。これからも科学的根拠を通じて、闘病生活を続ける患者とその家族にたとえ少しでも道標を示すことが出来れば幸いである。「患者を救うとともに、患者の家族を救うこと」。この思いが、私がMRとしての働く意味である。